

企画タイトル:

口唇と舌で鑑賞する立体作品《Jam Dipper》の文化的処方の可能性についての研究

【主旨】

本企画は口唇と舌を用いて鑑賞する立体作品《Jam Dipper》(Fig. 01)の制作と、文化的処方としての可能性について口腔領域専門の研究者と共同で研究を行うものである。

【目的】

この企画では《Jam Dipper》の制作を通して、以下の目的を達成することを目指す。

- ・《Jam Dipper》の試作品を制作する。
- ・口唇と舌の感覚や運動が心身に与える影響を先行研究から調査し、文化的処方に応用する仮説を構築する。
- ・「芸術未来研究場」展などで社会へ発信する。

【内容】

《Jam Dipper》は、ハニーディッパーのようなカトラリー的な機能を持つ美術作品として構想している。ハニーディッパーのようにヘッドを持ち、そこに溝や不定形な形を与えることで《Jam Dipper》に独自性を与えている。これをジャムにディップし舐めることで鑑賞する作品だ。

口に含む作品の制作と、口唇と舌の感覚と人の心との関連を探るには医学的知見が有効である。そこで東京医科歯科大学医歯学研究所博士課程で歯科医師の三宅理沙氏とも共同研究を行いたい。

医学において口唇や舌に関するトピックは豊富であり、たとえば脳外科医のWilder Graves Penfieldが考案した大脳の運動野と感覚野のホムンクルスは、身体の各部位が大脳で占める比率と位置をマッピングしたイメージで知られるが、このイメージの中で口唇や舌は数ある身体部位の中でも大きく描写されている部位だ(Wilder P et al., Brain, 1937)。これは口唇と舌の持つ感覚器官としての豊かさを示している(Fig. 02)。

また、精神科医のジークムント・フロイト(1905)は口唇期とその性質が、私たちの精神構造の発達にとっても重要であると説明している。

さらなる調査が必要ではあるが、ここから期待される《Jam-Dipper》の活用法は多岐にわたる。

口唇と舌の感覚を意識することで、自己理解が深まる。子どもの感覚発達や情操教育に役立つ。または芸術鑑賞と感覚刺激を組み合わせたアートセラピーとしての用途も見込めるかもしれない。

こうした拡散した《Jam-Dipper》の可能性を具体化するためにも、口唇と舌が心身に与える影響を調査する必要がある。文化的処方としての実装のされ方もそこから見えてくるものが多いはずだ。このようなところに本企画が医療分野の知見を導入し、共創拠点の研究者らと共同研究を行う意義があるはずだ。

【文化的処方への美術理論の応用についての仮説】

インスタレーションという表現様式の研究を通して、インスタレーション的な作品への身体的参加によって観者の身体図式を組み替える理論が、心身の健康増進や自己理解を促進する文化的処方に接続する可能性を検証する。(美学者の河合大介の論文「自律性から関係性へ: インスタレーションアートにおける観客の身体性」2008年、の議論を参照)

《Jam Dipper》は口内に作品を設置し、舌で舐めるという身体的参加によって鑑賞することでインスタレーションという表現様式の範疇にある(Fig. 03)。



Fig01_《Jam Dipper》イメージ図



Fig02_ホムンクルスが《Jam Dipper》を鑑賞している。口唇と舌の感覚には多様な可能性が潜在しているはずだ。

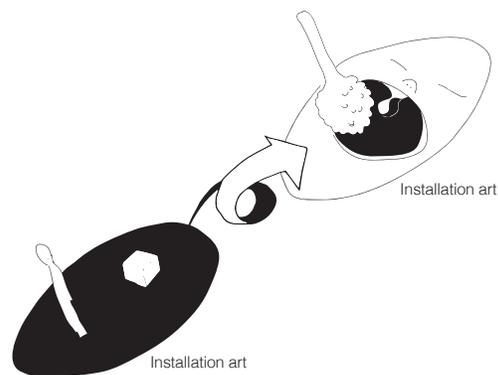


Fig03_《Jam Dipper》は作品が身体の内側にあるというのが珍しいが、作品に身体的参加がともなうゆえにインスタレーション作品ともいえる。